
悪魔と契約

紫月 瑠璃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約

【Nコード】

N7666J

【作者名】

紫月 瑠璃

【あらすじ】

気持ちの悪い巨大蜘蛛に追い掛けられ、絶体絶命の大ピンチ！神様でも仏様でも誰でもいいから助けてと願ったら聞こえてきた声。この声の正体は？

第1話（前書き）

初投稿です。稚拙な文章ではありますが少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

第1話

心臓が耳元にあるかのように自分の鼓動が大きく聞こえる。邪魔な木々を避けながらの全力疾走はかなりキツくて、体力には自信があったがそろそろ限界だ。

諦めて居なくなってくれてないかな、と後ろを振り向けば――

――追いついてくる赤と黒の斑模様をした巨大な蜘蛛。

うああああ！！やっぱりまだいた！！まずい、こっちはもう限界なの。
に。

向こうはまだまだ元気そうだ。今まで何とか距離を縮めないようにしてきたけど、この分じゃ追いつかれるのも時間の問題だろう。

ただでさえ辛いのに、絶望的な状況に気付いてしまつて頭が朦朧としてきた。

視界がブレて、しっかりと走れなくなる。

目の前に飛び出ていた走るのに障害となる邪魔な木の枝を身を屈めることで避けたまではよかったが、その拍子にでこぼこした道に足を取られて思い切り転んでしまった。

起き上がらなくちゃ、ほら立ち上がって走れ、早く逃げなきゃ殺されてしまう。

そう強く思うのに足に力は入らず、体はいうことをきいてくれない。

ああ、どうしよう。巨大蜘蛛はもう目の前に来てしまった。体中が

恐怖に支配されているのが分かる。感情が制御出来なくなつて、気持ち頭が頭に浮かんで消えてゆく。

怖い、こっちに來ないで、死にたくない、気持ち悪い、生きたい。
嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ。神様でも仏様でも誰でもいい、この際悪魔でも構わない。誰でもいいから誰か、お願い私を助けて！！

「ほう、ならば私と契約をしましょうか？」

第2話

なに、今の！

唐突に聞こえた声に驚き顔を上げた私は更に驚くものを目にして固まった。

何と、巨大蜘蛛の動きが止まっているのだ。それも襲い掛かっている途中の不自然な体制で。まるで強制的に動きにストップをかけられたように。それだけじゃ無い、先程まで風が吹く度に聞こえていた草木のザワザワとした音も聞こえない。

そして、そう。なによりもはつきりと先程までとは違う事がある。一目見てすぐにおかしいと思う事が。

—— 景色が、白黒なのだ。

全てがモノクロ。一体どういう事なのだろう。訳が分からなくてもう一度周りを見渡し、ふと下を向くと……………。

わ、私も白黒になってるー！？
な、なな何これ大丈夫なんだよね？まさか一生このままとか無いよね！？

理解出来ない事ばかりでアワアワとパニックに陥っていると、視界に靴が映りこんだ。—— 靴？

バツと顔を上げるとすぐ傍に男の人がいた。こ、この人一体何処から……？ 大体、こんなに近くに來られて気付かないなんて……。

自分と同じく白黒の彼を啞然として見上げていると、彼は屈んで私と視線を合わせた。そして、それはそれは美しく微笑んだ。

「私と契約するのならば、貴女をあのかみから助けましょう。」

この声、さっきの！

助けてくれるって、でも……

「契約？」

私が聞き返すと彼は笑みを深めた。

「そう。契約です。」

落ち着いたテノールで彼は答える。

ああ綺麗な声だなあ、とこんな状況だというのに聞き惚れかけていた自分に気付き、慌てて問い返した。

「そ、その契約の内容は？」

私の至極当たり前の問いに、しかし彼はこう答えた。

「それは教えられません。」

そんな、内容が分からないのに決められるわけがない。

「そんなの契約になりません！ それじゃあこちらがあまりにも不利

じゃ無いですか!！」

これでは、例えここで助かったとしてもその後どんな目に合わされるか分からない。

「おや、ではここで命を捨てますか？私はそれでも構いませんが。」

その言葉に何も言い返せなくなった。そうだ、私の力ではどうあがいてもあの巨大蜘蛛には勝てないだろう。疲労困憊の今の体では逃げることにすら絶望的だ。

今此処で人生を終えるか、助けられた後どうなるか分からないが生きる事を選ぶかの二者択一。

「さあ、どうしますか？」

それしか選択肢がないのだと分かった後は簡単だった。私が望んでいるのは――

「分かりました。貴女と契約をします。」

私が望んでいるのは、生きること。

「一度結んでしまえば、私が解かない限り続きます。構わないのですね？」

丁寧な言葉遣いなのに、その目だけは獲物を狙う野獣のようで、背筋にゾクリと寒気が走る。でも、

「はい。」

迷いなく私は答えた。生き延びるためならば、どんなことでもしようとして決意は固まっていた。

それでは、と彼は私の顔に手をあて、近かった距離を更に縮めてきた。

「あ、あの何を……むうツ!？」

彼が何をする気なのか理解できず、問おうとした言葉の最後は声になることなく彼の口内へと消えて行った。
そう、キスをされたのだ。

「ヤメツ……ふっ……ん……ンン……」

驚き、口を閉じる前に侵入してきた彼の舌が隅々まで這わせられる。そして、身体の中から何かが吸い取られるような不思議な感覚を感じた後、また身体に力が入らなくなった。

「契約成立。」

彼はそう言った後、クタリとした私の身体を抱き上げてその場から少し離れた所にあった木にもたれさせるように私を降ろした。

景色が白黒になってから、少しだが回復していた身体はどういう訳

かまた上手く動かないし、何だかとても眠たい。こんな状況で眠るな、と首を振り、元の場所に帰った彼の方を向けば彼はあの巨大蜘蛛に指を向けていた。そして。

指を弾くような仕草をしたあと、そこにいた蜘蛛は塵と化していた。本当にもう、理解の範疇を超えた事ばかりだ。分からないことの方が圧倒的に多い。

服に飛んだ塵をはらった彼はこちらに来てまた私を抱き上げた。

「さあ、もう大丈夫ですよ。」

サラサラと私の髪を梳きながら彼は言ったが先程の光景のせいで一切安心出来なかった。

何だかもう聞きたいことがありすぎて何を言えいいのか分からなくなっただので、取りあえず一番気になっていたことを聞くことにした。

「…貴方は一体何なのですか？」

クスリと笑った彼は今度はきちんと質問に答えてくれた。

「私？私は——悪魔ですよ。」

聞かなければよかったと心底後悔したが。

第3話

は？

悪魔？悪魔ってあの悪魔？デビル？

「冗談ですか？」

「まさか。正真正銘本物の悪魔ですよ。この空間の時間を止めたのも私ですし。信じられないのなら、もう止めておく必要もありませんから取りあえず元に戻しましょうか。自分の目で見れば信じられるでしょう？」

あ、やっぱり。薄々そうかなーとは思っていたけどこの白黒世界は彼の仕業らしい。

そんなことを考えている間に彼はパチンと指を鳴らした。

瞬間、世界に色が戻り時間が動き出す。瞬きすることも出来ない、本当に一瞬の出来事。

下を向けば私にもちゃんと色がついていた。

「信じて頂けましたか？」

その言葉にコクコクと何度も頷き、返事をしながらずっとしていた視線を彼に向けたのだが。

「本当に悪魔だったんです…ね！？」

彼を見て驚いた。彼にも色が戻っていたのだ。いや、それはいい。私にも景色にも色は戻ったのだから彼だってそうだろう。気になるのはそこじゃ無い。

彼が纏っていた色だ。

身につけているものは全て漆黒。でも、彼の髪と瞳はそれはそれは鮮やかな――真紅だった。

「――綺麗……。」

彼が驚いたような顔をしたが構わず続けた。

「貴方の髪と瞳、とても綺麗。」

自分が素になっていることにも気付かず、本心からの笑みを彼に向けた。漆黒に染える鮮やかな赤はそれほど魅力的だったのだ。

彼は一瞬だけ驚きに目を丸くしたが、すぐに壮絶な色気を振り撒く笑顔になった。

そういえば、色彩に気を取られて気がつかなかったけど、この人凄くカッコイイ。テレビで騒がれてるイケメンだとか目じゃない位にカッコイイ。

「ありがとうございます。」

ポオ、と見とれていたのが彼の言葉で正気に戻る。

ああ――！というか私助けてもらったのにお礼すら言っていない！

「あ、あの――！さっきは助けてくれてありがとうございます！――！」

「いいえ、気にしないでいいですよ。貴女はそれに見合った代償を払うのですから。」

ニコニコと心なしか上機嫌になったように見える彼から告げられた言葉にビクリと私は震えた。

そうだ、契約。私は善意で助けられたのではない。取引によって助けられたのだ。

しかも彼は悪魔だ。一体どんな要求をされるか分からない。一生こき使われるとか？、凌辱されるとか？い、いたぶり殺されるとか？！

「貴女の払う代償はこれから先の一生の全て。」

一生こき使われるコース？い、嫌だ！でも殺されるよりは……。

「これから先の人生の全てを私の傍で生きること。」

――あれ？なんか今の言い方おかしくない？それだと何だか一生こき使ってやる宣言っていうより……

「私の名はレイディウム・アストリア
貴女の夫となる者の名です。」

夫？

「おつとおおおおつ！？」

もう無理だ。完全にキャパオーバー。今日の出来事の何より衝撃が大きかった。大きすぎる。こんなのただでさえギリギリなところで保っていた頭が受け止められる訳が無い。

今私は頭から煙を出しているんじゃないかなと思うっていると、やはり傍から見ていても分かるくらいの混乱ぶりだったようだ。

「もう疲れたでしょう？眠ってしまつて構いませんよ。」

と言われ、抱き抱える力が少し強まった。そしてそのままゆっくりと背中を撫でられる。

思い出したことでドツと押し寄せて来た疲れと眠気に抗う事も出来ず、一定のリズムで上下する手の平の心地良さを感じながら私は眠りの世界へと旅だったのであった。

第4話 Side he (前書き)

レイディラム目線です。かなり短いです。

第4話 Side he

自分の腕の中で眠った、まだ名も知らぬ少女を見る。

腰まで伸びた長く美しい黒髪を持ち、人間だというのにこの世界の者にも引けを取らぬ程に愛らしい顔立ちをしている。

彼女を見つけたのはたまたまだった。しかし一目見てすぐに欲しい、とそう強く思った。

生きのびる希望をちらつかせ、絡め取って逃げられないようにして触れた唇は信じられないほど柔らかく、歯止めが効かなくなりそうだった。

言葉も解さない下等な害虫を駆除してから彼女の元に帰り、悪魔である事を証明するために術を解けば、彼女は私の髪と瞳を見て綺麗だと褒めてきた。

それに私がどれだけ喜んでいたか、彼女はまったく分かっていないのだろう。この色を見て綺麗だと言ってきたのは彼女が初めてだというのに。

この言葉も、言葉と共に向けられた美しい笑顔も忘れる事は決してないだろう。

出会う事が出来た運命の人。まさか出会えるなどとは思っていなかった。彼女と巡り逢えたのは奇跡といってもいい。それほどに運命の人と出会える者は少ないのだ。

悪魔の契約は絶対だ。どんなことをしても破ることは出来ない。

この契約がある限り彼女は私から逃げることは出来はしない。

彼女が傍にいるこれからを思い、抑え切れ無い歓喜の笑みを浮かべながら彼女に触れるだけのキスを落として、私は自分の屋敷へ移動した。

第5話

柔らかく暖かいものに包まれた心地良い微睡みの中、フワフワとまるで羽でくすぐられるようなこそばゆさを感じて少しだけ意識が浮上した。

それは額に触れて、瞼に触れ、頬、首筋を通って鎖骨の辺りまでおりて行った後、再び頬に戻ってきた。

至福の時間を邪魔されたくなくて、身を擦ってそれから逃れようとするのにクスクスと小さく笑みを零しながら追い掛けてくる。

うう、しつこいなあ。まだ眠ってたいのに……………てか、あれ？笑う？

「起きて下さい。朝ですよ。」

耳元で囁かれた腰が砕けそうな激甘ボイスに、私は夢から現実にそれはもう超スピードで引き戻された。

パチリと目を開けると、目の前には（自称）私の夫予定だという悪魔のそれはそれは美しいお顔が。

「おはようございます。」

まだ驚きから回復出来ない私に彼——レイディウムは言つて、額にキスをしてきた。そのまま下に向かって行き瞼、頬と辿っていつて——……………さっきくすぐったかったのはこれのせいか！！

寝ている間にキスされまくってたんだ！！

驚愕の事実には然として、先程と同じように鎖骨まで一度下がって頬に彼の唇が戻ってきた。

良かったこれでこの羞恥地獄から解放される、と安堵したのもつかの間、そのまま離れて行くと思っていたレイディアムの唇はなんとそのまま私のそれに重なった。

かなり驚きはしたが、しかしこれで二度目なのだ。今度は好き勝手にさせないぞと固く口を閉じた。レイディアムが舌で押して開くよう促してくるけど無視してやる。

「口、開けて下さい。」

フルフルと首を横に振る私の頑なな態度に、彼は一度口を離れた。

あ、諦めてくれた……？

一瞬そう思ったが、どうやらそうでは無いということが彼の顔で分かった。

笑っているのだ。とても。

いや、私が起きてからずっとレイディアムは笑顔を絶やさなかったのだが、何と云うか笑顔の種類が違うのだ。

ニコニコという感じの邪気の無い笑顔から、口の端を上げてニヤリと笑う邪悪な笑みになったというか……………。

とにかく、身の危険を覚えるには充分な黒さを持った顔だった。

——え、あ、何か……ヤバイ？

「なら、仕方が無いですね？」

何が！？何が仕方無いの！？

気がつかない内に無意識で後ずさっていた身体をグイッと引き寄せられ、再び互いの唇が重なった——のだが。

ふうふううう！息！！息が出来ない！！！！

口と同時に鼻もつままれたのだ。勿論口は開けないし、鼻をつまんでいる手を引く張つてどかさうとするけどそんなに力が入っている訳でもないのに何故か外れないし。

暫くは負けるもんかと頑張っていたが、しかし限界が近づいて来た。

うああ、そろそろキツイッ。

でもでも、口開けちゃうのはヤダ！

いつの間にか閉じていた目を開けてチロリと彼を見ればバッチリ目が合ってしまった。その目に面白がっているような色を見つけて尚更悔しく思う。

だって、余りにも余裕そうなんだもん！こっちはいっぱいいっぱいなのになのに！

そうはいつでも呼吸というのは何時までも我慢してられるものじゃない。

も、もう……限界っ。

プハアッと水の中から顔を出したときみたいに思いつ切り息を吸った。

するとまあ、案の定というか何というか、開けてしまった口から入って来たのは彼の舌で。

「ふっ……ンン……あふ………ん」

我が物顔で口内を動き回るそれに翻弄され、彼が満足して離れたときには息も絶え絶えになっていた。

「すみません。少々浮かれていて、歯止めが効きませんでした。大丈夫ですか？」

そう言いながらレイディウムは私を抱き起こし、ベッドに腰掛けた自分の膝の上に横抱きにして乗せた。

「さて、昨日の事は覚えていますか？」

その言葉に昨日起こった色々な事が頭に浮かぶ。あんな強烈な事忘れるものか。

「はい。」

「良かった。では昨日の会話の続きをしましょうか。まずは、貴女

の名前を教えてください。」

「藤咲 楓です。えと、藤咲が姓で、楓が名前です。」

「カエデ。綺麗な名前ですね。貴女によく似合う。それではカエデ、一つずつ説明していきま……」

グキユルルル……。

は、恥ずかしい！

お腹なっちゃった！！

顔が熱くて見なくても真っ赤になっているのが分かった。

ち、沈黙が辛い……。

どうしよう、黙ってるのが辛い。でも、顔上げるのも恥ずかしいし……。

脳内会議を行っていた私を現実に戻したのはククツという押し殺した笑い声だった。

「本当に……可愛い人ですね。」

クスクスと笑いながら私の頬にキスをして、続きは朝食を食べてからにしよう、と私を膝から下ろし彼は立ち上がった。

レイディウムに手をとられ、案内しますと手を引かれた。

部屋を出てすぐのところで控えていたメイドさんのような人に朝食の用意を、と言った彼にメイドさんは、はい旦那様と答えてどこかへ向かった。そう、彼女は旦那様とレイディウムを呼んだ。

ああやつぱり、と思う。やはり高い地位を持った人なのだと。

だって、凄いのだこの家。物の価値なんか分からない私にすら高価だと分かるものばかりだし、さっきまで私が寝ていた部屋は広いなんてもんじゃなかったし。

と、そこまで考えて彼がこちらをジッと見ている事に気がついた。

「あの、レイディウム…様？」

少し迷って様付けしてみた。さんでは失礼かと思ったのだが彼は眉間に皺をよせた。

「レイディウムで構いません。それに話し方も、昨日のように話して下さい。」

昨日…？

いまいち伝わってない事が分かったのか、彼は更に付け足した。

「私の髪と瞳を褒めてくれたでしょう？」

にこやかに微笑まれて思い出す。自分の恥ずかしい言葉を。

「いや！あれは、そのですね、えっとあの…」

ようやく収まりかけていた顔の赤みを取り戻しながら、しどろもど

ろになった私に彼は触れるだけのキスをした。

「素のカエデで接して欲しいし、名前も様付けなんてよそよそしいのは嫌ですよ。」

「そ、それじゃあレイディアム…さん。」

やっぱり呼び捨ては無理！まだ私にはハードルが高いよ。

「まあ、今の所はそれでよしとしましょうか。」

まだ少し不満げだけど、取りあえずは納得してくれたらしい。

では行きましょうかと言った彼に再び手を引かれて歩きだす。

そんなこんなで契約初日の朝は始まったのだった。

第6話

このお屋敷の感じからして王様がご飯を食べるような長いテーブルがある部屋を想像してたけど、レイディラムさんに連れられて来た部屋には普通よりずっと大きなテーブルはあったけど、そこまで現実離れたものじゃなかった。どちらかというと高級レストランのような雰囲気だ。

そのままエスコートされて椅子に座ったところまでは良かったんだけど、座ってからあることに気が付いた。

——マズイ、私マナーとか分かんない……。

だってまだ16歳なのだ。かしこまった所で食事することなど無かったからマナーを覚える必要も無かった。ただか16歳が知っていることなど、ナイフとフォークは外側から順に使っていくとかその程度だ。

ヤバイ、どうしよう…。

悩んでいる内に料理が運ばれて来てしまつて、見てみるとやっぱり美味しそうだけどすごく食べにくそうな料理だった。

「どうしました？嫌いなものでも入っていましたか？」

ジッと見るばかりで手を付けようとしないうちに私を見て、レイディラムさんが気遣わしそうに言う。

違う、けど食べ方が分からないの、なんて言うのも恥ずかしいし…

…。

「ごちゃごちゃ考えている間に、これは下げましようか、と言ってメイドさんに料理を下げるように指示しようとするから、黙っていて間違えるほうが恥ずかしいと覚悟して彼に大丈夫ですと答えた。」

「しかし…。」

「本当に大丈夫です。その、食べなかったのは嫌いな物があるからじゃなくて、……マ、マナーが分からなかったからで……。」

「うう、私カッコ悪いよー……。」

パチリと目を瞬いた彼は、数瞬後意味を理解してクスクスと笑い声を漏らした。

「ああ、本当に笑われてばかりだ…。」

俯いて少し落ち込んでいると、レイディウムさんは立ち上がって私のすぐ傍に来た。

顔を上げて彼を見れば、蕩けそうな笑顔を向けられて、何故そんなに嬉しそうなのか理解できず首を捻れば信じられない言葉が降ってきた。

「そういうことなら心配しなくても良いですよ。私が食べさせてあげます。」

「は？」

ポカンとしている私を抱き上げて自分の席の方へ戻った彼はまた私を横抱きで膝の上に乗せて席についた。

「ああ、それと今のは見逃してあげますが、次に敬語を使ったらお仕置きしますからね。」

お、お仕置きつてなに――！？

ああいや、今はそれよりもこの状態のことについて言わなきゃ。いや、お仕置き発言も置いとけないけど。

「あの、私は別に食べさせて欲しい訳じゃなくて、分からないので今回は変なところがあっても見逃してください――じゃなくて、見逃してねってことが言いたかったんで――でもなくて、言いたかったの！」

噛みまくりながらも何とか伝えたのに、レイディウムさんはどこ吹く風で。

「私が食べさせればマナー違反なんかそもそもしないんですからいいじゃないですか。」

とか言ってくる始末。

「そもそもこの態勢が既に思いつ切りマナー違反！」

流石にそれくらいは分かるよ――！寧ろ分からない人の方が少ないですよ――！

そう言っただけで精一杯反論したが、結局彼の、言うことを聞かないなら

此処でキスしますよ、という囁くような脅しに反撃を封じられ、大人しく彼にされるがままになるしかなくなったのだった。

だって、人前でキスは無理だもん！と考えて、人前じゃなくても好きな人でもないのにキスしちゃ駄目じゃん！！と首を振った。

そんな私を不思議そうに見ながら、彼は一口大に切った肉を笑顔で差し出してくる。

それをパクリと口に入れてモグモグと咀嚼。ゴクンと飲み込んだのを見計らい、今度は野菜が。パクリ、モグモグ、ゴクン。

次はちぎられたパンで、同じようにパクリ、モグモグ、ゴクン。

次はスープ、次はまた肉、次は……と、口に入れられてはそれを食べるというのを繰り返す。

きつと普通に食べたらどれもとても美味しい筈なのに、緊張と羞恥であまり味が分からないのが残念だ。ええ、とてもとても残念ですよ！

この歳になって食べさせられた事なんかないし、これだけ密着すれば緊張する。でも、どちらかというと羞恥の方が大きい。

何故かといえばまあ、見られているのだ。料理を運んで来てくれたり、水を注いでくれたりしてるメイドさんや執事さんに。それも皆さん少し赤い顔でチラチラと。

私達何も見てませんから〜という雰囲気、でも気になるものは気になるんですと言わんばかりに時々こちらを見るのだ。

い、いたたまれない！というかレイディウムさん、何故に貴方はそんなに嬉しそうな笑顔なんでしょう？この人恥ずかしいとか感じないんだろつか。いや、感じるなら最初からこんなことしないか、とか色々考えている内に漸く最後の一切れに。

パクリ、モグモグ、ゴクン。

ハアアア、漸く終わった…。私、食事がこんなにも大変だったの初めてだよ。

口についていた油を拭き取られて、長かった朝食が終わった。

「さて、部屋に戻りましょうか。」

そう言っただけ彼は私を抱き上げたまま先程の部屋へ向かおうとする。勿論私はこんな恥ずかしい事は御免だ。

「降りして下さい。自分で歩けます！」

足をバタバタと振って、降りしてアピール。

でもレイディウムさんから返された言葉は全然関係ないものだった。

「あ、敬語使いましたね。——お仕置きです。」

しまった忘れてたあ！！すっかり忘れてたよ！油断したあ！！

「う、ごめんなさい。次から気を付……ンッ」

次から気を付けるから、って言おうとしたのに問答無用でキスされた。皆の前で。それもめちゃくちゃ深いのを。皆の前で！

「ンッ……ン……あふ……ハッ……」

ちょうど目が合ってしまったメイドさんの女の子に真っ赤な顔で視線を逸らされたのが余計に恥ずかしかった。

年上だろうし、偉い人みたいだから敬語で話してたのに、もう頼まれたってレイディラムさんに敬語なんか使うもんか！！

こうして彼の思惑通り、私は彼に敬語で話すのをやめてしまったのだった。

結局このキスでうやむやになってしまって、彼に抱き上げられたまま部屋まで運ばれたし、今の所すべてが彼の思い通りになっていて、抵抗がなに一つ成功していないことに気がついて愕然となった。

第6話（後書き）

お気に入り登録してくれた皆様、有り難うございます。とても励みになります。

第7話

部屋に戻ってきてからたくさんの事をレイディウムに聞いた。私には此処が何処なのかすら分らなかったから。レイディウムは丁寧に教えてくれた。

それによると、此処は魔界と呼ばれる所らしい。魔王様が統べる世界で、悪魔だけじゃなくて吸血鬼とか多種多様な方々がいるんだとか。ちなみに魔王様は魔王という種族らしい。てつきり王座の名前が魔王なんだと思っていたからびっくりだ。

それから、人の形をしているのは力の強い者だけらしい。私を襲ってきた巨大蜘蛛はかなり下等だと言っていた。あと、たぶん魔界というのは弱肉強食なのだと思う。あの蜘蛛の話をするときのレイディウムからはそんな感じがした。

他にも力の強さが分かる事はあるみたいだけど、聞いたら何故が困った顔ではぐらかされた。別に知らなくても良さそうな事だし言いたく無いならそれで構わないけど。

こうして魔界についての大まかな説明が終わった後は私についての話になった。

「実を言うと、カエデのように人界から魔界へ来る人間は時々ですがいるんですよ。」

「そうなの!？」

滅多にあることじゃないと思ってたのに。でも嬉しい誤算だ。だっ

て、私以外にも人間がいるってことだもん。

「はい。そして魔界に来る者はその大半が人界で生きていく事が出来ない程辛く、苦しい思いをした者達らしいです。ところでカエデ、貴女―――此処に来る前の記憶はありますか？」

「なに言ってるの？あるに………」

決まってるじゃん、と続けようとして気がついた。――

――思い出せない。

「あれ……？ちよつと待ってよ……だって……え？………」

何も思い出せない。いや、正確には詳しい事が何も思い出せない。

例えば、住んでいた場所。日本の北海道の札幌市だ。でも、町並みは？私はそこでどんな生活をしていた？

他にも、人。自分の周りにいた人間が誰ひとりとして分からない。顔も名前も思い出せない。

というか、そもそも指摘されるまで気付かないことからしておかしい。これは絶対に異常な事なのに。

でも、それ以上に変なのは異常だと認識したにも関わらず今の私がいいたいして取り乱す事もなく割と平然としている事だ。

何も思い出せないという異常に驚きと戸惑いを感じはしたが、不安は一切覚えない。

「それはカエデ、貴女も人界から魔界へ逃げて来たからでしょう。」
何故？と聞けばそう答えが返ってきた。少々面食らったが、ああ成る程な。と納得できた。嫌だ、此処には居たくないという思いで異世界へと来たなら記憶など無くて当然かもしれない。

「それじゃあ私は、向こうで生きる事が出来なくなつて魔界に来たんだ。」

「ええ。記憶も失っていますし、そうだと思います。先程も言いましたが、魔界に来る者の大半がその理由です。たまたま魔界と人界を繋ぐように出来た亀裂に落ちて魔界へ来る者もいるにはいますが、そんな不幸な人間そうそういませんよ。確率で言うなら天文学的な数値よりも低いでしょうから。」

そりゃそうだね。なんてったって異世界だもん。そんなポンポン行けたらファンタジーから異世界トリップというジャンルは消えているだろう。

そんな風にそのあと話をして、話始めて1時間程たった頃。

「さて、まだ話していたんですが実はそろそろ仕事をしなければならぬんです。カエデ付きの侍女を用意しますから、屋敷を見て回って下さい。昼食は一緒に食べましょうね。」

チュツと触れるだけのキスを落とし、真っ赤になった私にクスクスと笑ってからレイディாம்は部屋の外へ出ていった。

レイディாம்が出て行き、顔の熱を冷ましながら待つこと数分。入

って来たのは茶色い髪をした可愛い人だった。

歳は多分同じくらい。目が大きくパツチリしていてとても可愛い。

「カエデ様付きの侍女となりましたエリサと申します。誠心誠意お使えさせていただきます。」

「あ、はい。よろしくお願いします。あの、エリサさん、様付けをやめてほしいんだけど…。出来れば呼び捨てで。」

「そんな、旦那様の婚約者であるカエデ様を呼び捨てなど出来ません！―それに私にこそ、さんなど必要ありません！」

―あれ？

え、今エリサさん何て言った？

婚約者？

「あ、ああああ！―！」

急に叫んだ私にエリサさんがビクツとしたのが見えただけ、構っていられなかった。だって、

「1番大事な事聞くの忘れてた――！！！！」

人生でベスト5に入るんじゃないだろうかという失敗に気付いた所だから。

まあ、記憶が無いから今までしてきた失敗も当然分からないし、気分的にだけど。

第8話

エリサさんに「慌てなくとも、これからいくらでも聞く機会がありますから落ち着いて下さい。」と言われ、それもそうだと冷静になった私はレイディラムに聞けなかった事を彼女に聞くことにした。

婚約云々は本人に聞くからいいとして、他に知らなければならぬのは悪魔そのものについてだ。

「ねえ、エリサさん。ちょっと聞きたい事があるんだけどいい？」

「勿論です。私に答えられる事ならば喜んで。」

「あのね、悪魔について知りたいの。あ、そういえばエリサさんは何の種族なの？エリサさんも悪魔？」

「いいえ。私はヴァンパイアですから悪魔じゃありませんよ。」

あ、良かった。出来れば悪魔の人以外から聞きたかったから。

「そうなんだ！ヴァンパイアってことはエリサさんも血を飲むの？」

架空の世界にしか存在していなかった人が目の前にいると思うと、どうしても興味を惹かれてしまう。

「勿論飲みますよ。」運命の人」の血だけを、ですけど。」

「運命の人」？」

「はい。魔界に生まれた者には皆、”運命の人”がいるのです。長い一生を添い遂げる人が。ヴァンパイアはその運命の人の血しか飲めません。そのせいかヴァンパイアの運命の人は極近しいところで生まれます。ですから出会え無いという事はまずありませんが、他の種族だと出会う方が稀なほどです。」

凄い。何だか物凄くロマンチックだ。魔界なのに。もっとおどろおどろしい感じを想像してたよ。

「いけません。話が逸れてしまいましたね。悪魔についてでした。カエデ様は悪魔というのはどのようなものだと考えていますか？」

どのような…？どのようなっていうと、沢山あるけどやっぱり――

……

「凄く狡猾で極悪非道なイメージかなあ？あとは快樂主義で自分が愉しければそれでいい、とか。」

こんなかんじかな。あんまり良いイメージは無いんだよね。

「そうですか…。何と云えばいいんでしょうか、確かにそれも間違っ
つてはいませんが、そればかりでもないんですよ。」

「んん？どゆこと？」

そればかりではないって？

「確かに悪魔は極悪非道ですが、それを向けるのは敵とどうでもいい者――早い話が他人ですね。だけなんです。」

「そうなの？自分以外は見境なくって訳じゃ無いんだ？」

「はい。まあ中にはそういう方もありますが、それは悪魔だからというより本人の性格ですね。ですから基本的に私達とあまり変わらないのですよ。愛する者を傷つけたりはしないし、慈しみます。親愛の情もちゃんと持っていますよ。ただ、一度敵となれば容赦なく完膚なきまでに潰すというだけです。」

エリサさんの話に私は成る程と頷いた。

悪魔も普通に人を（悪魔を？）愛すし、大切にしようだ。冷酷なところはあってもそれを自分の敵に向けらるのとは仕方がないだろう。人間だって多かれ少なかれそういうのはあるだろうし。全く関係の無い他人にも、というところは少し引つ掛かるけど、取りあえず安心はできた。

だって、ねえ？一応婚約者って事になってるし、相手が安全なのかどうかも分からないんじゃない？どうしようもない。もしレイディウムがヤバイ人だったらビクビクしながら毎日を過ごさなくてはならない。それは絶対に嫌だ。この屋敷の外に出て自分の身を守る自信もないけど、閉じ込められていたぶられるよりは逃げる方がマシだろう。そんな風に考えていたけど、大丈夫そうだ。

「ありがとう、エリサさん。よく分かったよ。」

ニツコリと笑顔で御礼を言った。いや本当に助かったよ。

「お役に立てたなら幸いです。」

エリサさんもニコリと返してくれて、言葉を交わして緊張がとけた私達はお昼を知らせるメイドさんが来るまで夢中になってお喋りを楽しんだのだった。

第9話

エリサさんに案内してもらって朝食を食べた部屋につくと、レイディாம்はもう席についていた。

彼は私に気が付くとニツコリ笑って歩いてくる。

私のすぐ傍まで来ると、私の手を取り優雅にエスコートしてくれた。しかし、何故か私が座らされたのは椅子ではなくまたしてもレイディாம்の膝の上だった。

「あの…？何で膝の上？」

「朝もこうしたでしょう？」

もうむしろ何故そんな事を聞くの？とばかりの返事が返ってきた。

「え、まさかとは思うけど……一緒にご飯食べる度に、これするつもりとかじゃ……ない、よね？」

「勿論です。」

さ、最悪だー！……食事の度に羞恥プレイ！？一日三回羞恥プレイ！？

嫌だー！……！

「いや、あの自分で食べれるから！」

ここで流されたらこの先もこうなってしまう！

レイディラムの膝から下りて椅子に座ろうと思ったのだが、下りようとした瞬間に腰に回ったレイディラムの手がガッチリと押さえ付けてきて、下りるところか身じろぎも出来なくなってしまった。

「レ、レイディラム？何で押さえつけるの？」

「カエデが離れようとするからでしょう？貴女の席は私の膝の上です。」

分かりましたね？と凄みのある笑顔で言われ、私はコクコクと縦に首をふった。

私が頷くを見て、レイディラムは腕の力を弱めてくれた。あくまで弱めただけで、まだ力が入ってるけど。

「では食べましょうか。」

朝食のときみたく食べさせられ、恥ずかしくてしかたがなかったが、これからずっと続くんだからと開き直って気にしないことにした。すると、途端に味がよく分かるようになる。

おいしー！あんまり見たことの無い料理だけど、凄く美味しい。幸せだー！

と、幸せを噛み締めながら料理を一通り堪能したところで、レイディラムにエリサさんのことを聞かれた。

「エリサさん？いい人だったよ。色々教えてくれたし、優しいし。」

「それは良かった。合わないようでしたら別の者と変えようと思っ
ていましたので。」

「ううん。大丈夫。エリサさんと一緒にいるの楽しいし。――
あ、そうだ。ね、レイディウム。見て。」

両手を前に出し、水をすくう時のようにする。

そして、合わせた手の平に意識を集中していく。

――大切なのはイメージ。表したいものをより明確で鮮明に。

すると、手の平の上にポウツと光の球が現れた。

上手くいった。どうだ！とばかりに自分の手に向けていた目を上げ
てレイディウムを見ると、彼はとても驚いた顔をしていた。

それに満足して二度程深く頷いてから光を消し、レイディウムに話
しかけた。

「実はさっきエリサさんに魔法の事を聞いたの。そうしたら簡単な
この魔法を教えてくれて。どう？中々上手く出来てたでしょ？」

「……ええ。きちんと出来ていました。しかし、何でまた魔法のこ
となど……。」

む？何か答えながらレイディウムの眉がよって眉間に皺ができてい

るのは何故？……………マズかったのかな。

「だって、魔法なんて私のいた所には無かったもん。……ダメだった？」

私の顔も答えているうちにどんどん下がっていつてしまう。

怒られるかな？とチロリと目だけでレイディウムを見上げると、何故かレイディウムは一瞬身体を硬直させてから、ハア、とため息をついた。

「いえ、駄目じゃありませんよ。ですからそんなに落ち込まないで下さい。」

頭を撫でられ、髪を梳かれる。

その優しい仕種に顔を上げてレイディウムを見た。

「怒ってない…？」

「ええ。怒ってなどおりませんよ。」

何時もの柔らかい笑顔で答えてくれた。

「本当！？良かった！それじゃあ他にも魔法の練習してもいい？」

瞬間、漸く見せてくれた笑顔は消え、またしても眉間に皺が現れた。

「それは…。」

低い声でレイディウムが言うのを聞いて、浮上した気分は一転、また下降していった。

「うー……。やっぱりダメなんじゃない。レイディウムの嘘つきいー。」

そう言うと、途端にウツと息を詰める気配。それでも俯いて顔を上げなければ、つむじにハア、と諦めの溜息がかかった。

「分かりました。いいですよ、練習しても。ただ、危ないものは許しませんから。」

「ありがとう。レイディウム！…嘘つきなんて言ってごめんね。」

素直に謝ったら、少し困ったように笑って許してくれた。

「気にしないで下さい。ただ、私は心配なのです。ですから、くれぐれも怪我を負うようなことはしないで下さいね。」

「うん。分かってる。」

勿論だ。痛いのは嫌だし。

会話に一区切りついたところで、デザートが運ばれて来た。どれも凄く美味しそう。

これを食べたら午後からは早速魔法の練習だ。

それにしても、レイディウムが許可してくれて本当に良かった。というのも、ここまで食い下がったのにはちゃんと理由があった。

もし、何らかの理由でこの屋敷を出ることになったら？

レイディウムに追い出される、私がここから逃げ出す。

この二つの理由が今一番有り得る事だろう。もしもそんな事になれば――私はきつとすぐに死んでしまう。

魔界という場所での人間の扱いや立場のようなものが分からないからなんとも言えないけど、多分働いたりは出来ないんじゃないかと思う。

それではどうするか？私が目覚めたような森でサバイバル生活でも送る？

絶対に無理。サバイバルの知識も経験も手段も皆無に近い。

――今の私では。

そう、これは今のままならの話。

知識と経験は困難だが、魔法が使えるようになれば手段は手に入えられる。

そうなれば、生存できる確率はきつとかなりあがるだろう。

火や水を出せるようになるし、なにより戦えるようになる。エリサさんに聞いた話じゃ、私を襲った大蜘蛛のように人の姿をしていない魔物は魔法を使えないらしいから、練習次第で勝てるようになるもな

るだろう。

だから魔法はどうしても使えるようにならなければ。今が安全だからと先の事を考えないほど愚かではないつもりだ。

しかしこれは、もしもの話。今の私に逃げ出そうといつつもりは無いし、レイディウムもよくしてくれていて、追い出そうとすることはなさそうだ。

だから万が一に備えはするが、純粹に、魔法なんていう物語の中にしか存在しなかったものを楽しむつもりだし。

なんだか、凄く楽しみになってきた。早くデザートを食べてしまおう。

そう思った私は、レイディウムにもっと早く、とせがんだのだった。

第10話

昼食を食べ終わり、エリサさんと共に綺麗な花々の咲き誇る中庭へ。早速魔法の練習を始めた。まずはエリサさんに基礎の基礎から教えてもらう。

「そもそも魔法というのは、この世界に充滿している魔力を身体の中に取り込み、イメージによって固め、外へ放つことで発動します。」

「魔力って個人個人で持つてるものじゃないんだ？」

ちよつと驚いた。

「はい。ですが、取り込める魔力の量には差がありますので、おのずと力にも差が出てきます。大規模になればなる程必要な魔力も大きく異なりますから。」

ああ、成る程。

「あれ？でもさつき光の魔法を使ったとき、魔力を取り込んだりしなかったよ？」

「あの魔法はほんの少しの魔力で発動出来るので、無意識のうちに身体に入った魔力だけで使えるんです。つまり、魔力を取り込むことさえ出来れば発動します。」

「じゃあ、あの魔法は誰でも使えるんだ？」

「ええ、たいていの人は。ただ、時々魔力を取り込めない人もいますから、そういう方はあの魔法も使えないですねえ。」

魔界には魔法を使えない人もいるようだ。つまりは、魔法を使える使えないも、魔力を沢山取り込める取り込めないも、生まれ持った才能というか体質ということだろう。

「魔法って、決められた…型？みたいなものって無いの？」

「ありません。自分が想像したものを具現化させるのが魔法ですから。他人にない発想で魔法を生み出せば、それは自分にしか使えない魔法になります。」

実際、例えば火を使った魔法でも投げ付けて攻撃する者もいれば、炎の剣で切り掛かってくる者もいたり様々だと教えてくれた。

「そのため魔法の種類は星の数ほどあり、水を使っていれば水の魔法、火を使っていれば火の魔法、光を使っていれば光の魔法、というように大まかな区分しかされていません。」

つまり、魔法というのは要はその人の発想次第。発動の仕方とコツを習った後は自分で思った通りの発動が出来るように練習するのみです。

そう言った後エリサさんはしかし、と続けた。

「中には誰もが思いつき、尚且つとても危険な魔法もあります。そういうものは先に教えられ、それが出来るだけの力がつくまでやらないようにするんです。」

「危険って、どんな？」

「例えば、瞬間移動の魔法です。これは、”移動した先にいる自分が性格にイメージ出来ていないと、悲惨なことになります。”

悲惨って――――もしかして……。

「……移動した後、身体に足りない部分がある、………とか？」

「はい、その通りです。他にも、身体がバラバラになってしまったり、砕けてしまったり。魔法で何かを新しく生み出す分には問題はありませんが、元々有るものに影響を与えるものは危険なことが多いのです。それが自分や人の身体ならば、尚更。」

自分のバラバラになった身体を思い浮かべてゾツとした。レイディ
アムが魔法を覚える事に対して渋い顔をした理由が分かった気がする。

「分かった……。気をつけるね。」

「はい。それでは説明はこの位にして、練習に入りましょうか。」

「うん！」

気を引き締め直し、いよいよ魔法の練習に取り掛かった。

お昼から途中で休憩をとりつつ、数時間ずっと魔法の練習をして只今の時刻およそ18時。いい加減集中力の限界に達したところで今日の練習は終了となった。

「うあゝ疲れたゝゝ。けど楽しかったゝ。」

夢中になっていたから練習中は気がつかなかったけど、終わった途端にドツと疲れがきた。でも、目一杯遊んだ後のような疲労感は何だか心地良かった。

「それはようございました。さ、中へ戻りましょう。もうじき夕食です。」

はいと返事をして歩きだす。そういえば凄まじくお腹が空いている。

ご飯ご飯、と夕食に思いを馳せながら廊下を歩いていると沢山ある扉の一つが開き、中からレイディウムと知らない男の人が出て来た。

綺麗な銀髪のイケメンなお兄さんだ。

レイディウム達もこちらに気が付くと、レイディウムはしまったといわんばかりに眉を寄せ、銀髪のお兄さんは顔をキラキラと輝かせた。

第11話

パアツと満面の笑顔になったお兄さんはキラキラした何かを振り撒きながら一瞬で私達との距離を詰め、私の両手をパツと握った。

「この娘!? この娘がレイのお姫様!?」

なにやら興奮した様子のお兄さんはまじまじと私を見てくる。

……? 誰なんだろう? さっきのレイっていうのはレイディアムの愛称だろうから、レイディアムの友達かな?

目の前のお兄さんにはかりきを取られていると、いつの間にか傍に来ていたレイディアムが未だに私と繋がれているお兄さんの手をバシツと払い、私を抱き寄せてお兄さんと距離をつくった。

「分かっているのなら気安く触れないで頂きたいのですがね、ゼル。」

ゼルと呼ばれたお兄さんは手を振り払ったレイディアムを見て目を丸くしたあと、ニヤニヤとした笑みを浮かべた。

「いやー、ここの使用人達が話してたのは本当だったんだな。そんな顔をしたレイが見れるとは、たまには気まぐれも起こしてみるもんだ。」

からかうようにそう言った後、こちらに顔を向けて笑顔をみせた。今度はニッコリと。

「初めまして、レイのお姫様。ゼル・フォードライトです。」

「は、初めまして。」

お姫様とか恥ずかしい！うわわわ、西洋風の見た目通りこの人達は皆サラッとこういうこといえちゃうんだろうか。

「今日は用事で近くに來たついでにレイの顔でも見てこうかなと思つて立ち寄つただけけど、たまたま君の噂を聞いてね。あのレイに婚約者だつていつから驚いたよ。」

あのつてというのがどういうことを指すのか氣になるけど、取りあえず

「私のことが噂になつてゐるんですか……？」

「うん、突然女の子を連れて歸つて來たと思つたらいきなりの婚約宣言。今まで寄つて來てた容姿は良くても頭と尻の軽い女は全員相手にもしてなかつたのに急にこれだもん。君の話題で持ち切りだよ。」

「も、持ち切り……。」

そりゃあ、いきなり婚約者だなんて変に思われることは分かつてたけど、こうはつきり伝えられるとな……。

というか今この人、頭と尻の軽い女とか言つた？言つたよね？

……………毒舌？それも結構重度の。

そんな気持ちの込められた私の視線に氣がついた彼は、ん？と一度首を傾げてから、何かに思い至つたようで安心させるように柔らか

な笑みを見せた。

うわ、毒舌とか思ったの分かったかな。いくらなんでも失礼だよね謝った方がいいかな。

「あの、ごめんなさ——。」

「大丈夫、大丈夫。心配しなくてもその馬鹿女達はちゃんと排除しておくから。」

——はえ？

余りにも顔と言葉がミスマッチすぎて一瞬何を言っているのか分からなかった。

あんなに優しいのに笑いながら排除して……。毒舌だけでなく彼は腹黒でもあるようだ。
取りあえず、

「いえ、いらないです……。」

お断りだけはしっかり伝えておくことにする。

そう？と首を傾げる彼は変わらず笑顔を浮かべていて本心は全く読み取れないので、取りあえずレイディウムに助けを求めることにした。

「ゼル、今日はこの辺りで話は止めにしましょう。これから夕食なので。」

振り返って送った視線の意味を正確に理解したレイディウムは、暗

に帰れと言った。が、流石は腹黒毒舌なだけあって、

「あ、もうそんな時間？じゃあ久々にご馳走になろうかな。」

なんて言って慣れた様子で歩き出してしまった。

それを見て、ハアと溜息をついたレイディウムは微苦笑を浮かべていて、彼はやっぱりレイディウムにとって大切な友人のようだ。

「行きましようか。お腹がすいたでしょう？」

グウウウウ……。

言われて空腹を思い出した途端に私のお腹は盛大に鳴いてくれやがった。

恥ずかしい！またレイディウムに聞かれた！！

転げ回りたいくらいの羞恥に襲われている私を見て苦笑を微笑に変えたレイディウムは私を抱き上げてそのまま歩き出す。

「お、降ろして！何で抱っこなの！！」

「お腹も空いているようですし、こうした方が早いでしょう？」

何てクスクス笑いながら歩くレイディウムは降ろす気は微塵も無いようだ。

そのまま部屋に入ると、もう席に座っていたフォードライトさんはこちらを見てニヤリと笑った。

「おーおー、本当に今日はラッキーだな。こんなにレアなお前を見られるとは……て、おい。」

レイディウムをからかう気満々で話していたフォードライトさんが何故言葉を切ったかというところ、レイディウムが私を膝に乗せた状態で席についたからだ。……そう、朝や昼の時と同じように。

「ち、ちよつと、レイディウム？」

何してくれちゃってんの？という意味を込めて見上げれば、平然と「どうしました？」なんて返された。

「いやいやいや、どうしましたじゃねえだろ。え、何？いつもこうやって食べてんの？」

「ああ、それが？」

当たり前だと言わんばかりに返されたレイディウムの言葉にフォードライトさんは絶句している。

「料理が冷めますから、食べましようか。」

そんなフォードライトさんを気にした様子もなくレイディウムがパンを私の口元に持ってきたので、取り敢えずそれを口に入れたのだが、それを見たフォードライトさんが「しかも食べさせるんだ……。」と呟いたのが聞こえて堪らなく恥ずかしかった。

その後は他愛のないお喋りをしながら食事を取り、食後のお茶を飲んだ後、フォードライトさんは「いい土産話が出来た」と嬉しそうに帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666j/>

悪魔と契約

2011年1月22日12時03分発行